第 24 回研究大会

口頭発表「子どもたちの心を耕し，癒やしを与える学校飼育動物」

山本　佳子

はじめに

本校では，体験を大切にし，五感を通じて学ぶことを教育の柱としているこの度，「モルモットの飼育」を通して，クラスにとどまらず学校全体が，温かい空気に包まれ，一教科の一単元だけでは達成できない教育効果を得ることができた．

１　本校について

本校は，再来年は創立 100 周年を迎える幼稚園から高等学校までの私立学校である．特に高等学校チアリーディング部や吹奏部は，全国的にも有名である．

大阪府の北摂の丘の上にあり，鳥や虫なども多く，自然豊かな環境である．飼育小屋には，ウサギを２匹，中庭の池に鯉などがおり，飼育委員会の児童を中心に世話をしている．また，併設の幼稚園には，アヒルやクジャクがいる．

２　子どもたちの様子

モルモットを飼育することになったのは，２年生の 26 人．休憩時間には中庭に飛び出して，虫やトカゲやカナヘビを捕まえたり，花や葉っぱを摘んで遊んだりと，自然や生き物が好きな児童が多い．

また，本校の生活科では，２年生が学級田で米作りをする．毎年苗を分けてくださる農家が，アイガモ農法をされている縁で，１年生がアイガモの卵の孵化に挑戦している．毎年数羽の孵化に成功している．モルモットを飼育することになった２年生も，１年生の時にアイガモの孵化に成功している．

また，アイガモの誕生は学校中のニュースになり，５年生の国語の「新聞作り」の学習で，１年生児童や担任にインタビューをし，生き生きとした記事を書きあげていた．

３　ふわちゃんとの出会い

５月のゴールデンウイークが明けた頃，獣医さんに抱っこされてモルモットがやってきた．子どもたちは，信じられないという表情でとても喜んだ．

「ハムスターに似ている」とか，「ハムスターの２倍の大きさ」とか，ハムスターの方が子どもたちは親しみがあるようだった．とにかく「かわいい」という声が多く，そっと触ってみては，ふわふわしてる，けがもふもふしていると，口々にかんそうを言っていた．中には，「初めてモルモ

ットを見た」「触ったらかまれるかと思って怖い」という声も上がった．

４　お世話スタート！

モルモットが来てすぐに，学級会で名前を決めた．たくさん候補が挙がったが，毛がふわふわしているから「ふわちゃん」にしようということになった．はじめは教室内にケースを置いていたが，狭くなってきたので，大きなケージを，2 年生教室から近くの廊下に置く．獣医師から習ったお世話の仕方は，「うんちを取ってビニール袋に入れて捨てること.」それは，毎日日直の二人が，休憩時間にすることになった．その他に日直は，固形の餌をあげてもいいことになった．他の人もあげると，多すぎてしまうため．ただし，ふわちゃんは，野菜よりも雑草が好きなため，中庭の雑草を採ってきてケージ外からあげるのは，誰がしてもよいことになった．時々扉がきちんと閉まっていないことがあり，話し合ってこのようなルールにした．

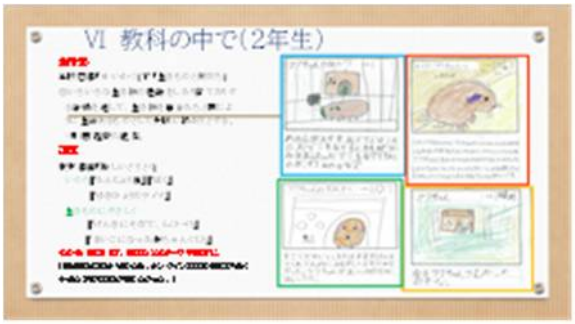
５　学校中への広がり

初めは子どもたちが葉っぱを差し出しても寄ってこなかったが，徐々に寄ってくるようになった．2 年生以外の児童もよく見に来ていた．

その内６年生男子が数名，毎日毎休み時間来て触れ合うようになった．中学受験を控えた６年生にとって，癒やしの時間となったようだ．とてもかわいがり，進んで世話をしてくれた．様子がおかしかったら，知らせてくれたり，ケージの外に出ていても彼らなら捕まえて戻してくれたりするので，教員も安心して任せることができた．

自然と，ふわちゃんの周りに，異学年の交流が生まれた．

６　教科の中で（2 年生）



ふわちゃんの飼育は，生活科の学習として取り組んだ．「生き物と友だち」という単元があり，定期的に観察記録を取った．観察カードを見てみると，絵や文が苦手な児童も，日々ふわちゃんをよく見ていることがわかった．

また，道徳では「いのち」や「生きものにやさしく」というテーマの単元がいくつかあり，それに絡めてふわちゃんの事を題材にした．子どもたちは，身近の動物のことなので，より深く考えることができた．それ以外にも，国語の作文や詩，ICT や図工の課題のモデルなど，幅広く扱うことができた．ただ，残念なことに，昨年はコロナ禍のため，2，3 度に渡り学校閉鎖やオンライン授業に振り替わったため，十分な時間を取ることができなかった．

７　１年後の子どもたちの感想

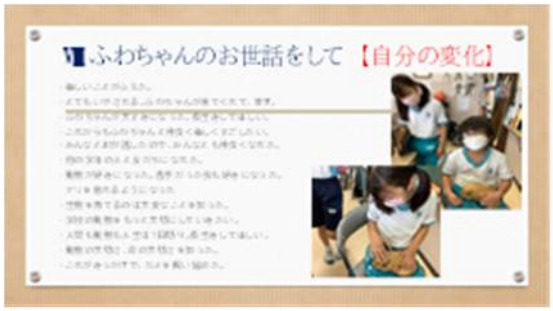
先日３年生になった子どもたちに，ふわちゃんを飼育しての感想を書かせた．子どもたちは，ふわちゃんのことを，ほんとうによく見ており，覚えている．大きさを測るときは，30 センチものさしを持ってきて測っていた．普段は丸まっているけれど，伸びると体長はさらに伸びることもよく見ている．野菜が嫌いで好きな草のことや好きでよくいる場所を書いている子もいた．自分たちよりも担任の私にすぐに慣れ，「先

生の足音を聞くとキュウキュウと鳴いてたね.」という子もいた.

また，連れてきてくださった獣医さんが教えてくださった，大きな音をたてたり，びっくりさせたらだめだとか，おっぱいが２つ，足の指の本数などもよく覚えていた.

これらのことは，身近で長期間飼育することができたから，見えてきたことであり，知りうることができたことである.

８　ふわちゃんのお世話をして



子どもたちの感想の中で目立ったのは，自分の変化を書いていたことだ.

「楽しいことが増えた.」「癒やされた.」「幸せになった.」「ふわちゃんが大好き.」「長生きして，これからも仲良く過ごしたい.」という肯定的な感想を持つ子が多かった.

それ以外に，「クラスのみんなとお世話したので，みんなとも仲良くなれた.」「他学年の人とも仲良くなれた.」などと，交流関係の広がりを感じていたり，「動物が好きになった.」「苦手だった虫を触れるようになった.」「これをきっかけにペットを飼い始めた.」というのもあった.

さらに，楽しいことだけでなく飼育の大変さに気づいたり，動物も人間も同じ命は一つ．大切にしなければならないという思いを持ったりする児童が増えた.

９　まとめ

１年間１匹のモルモットの世話を通して，子どもたちの生き物への興味・関心が継続したことは，とてもよかった．生き物が苦手な子も，継続的な世話をすることにより，生き物を理解し責任を持つことができた.

また，学年を問わず，子どもたちの居場所を作ることができた．家族や友達とうまくいかなかったときなど，ふわちゃんの所に来れば，まあるい目でふわふわの小さな動物が寄り添ってくれる．そばにいる異学年の人とも交流が生まれる．そのことは，私たちは意図していなかった点だったので，とても驚き，ふわちゃんに感謝している.

１匹のモルモットが，クラスの，そして学校全体を優しさに包み，さらに，同学年だけでなく，異学年間の交流を深め，子どもたち同士の絆を強くしてくれた．これからも，子どもたちと一緒に大切に育てていきたい.

（箕面自由学園小学校）